

清水鉄吉の登場シーン。高峰の研究室の看板を見つめる清水(古村さん)



シーンがあるが、その撮影場所がなかなか決まらず、悩んでいた。高岡市内にある操業休止中の製紙工場で、別の撮影をしていた時、敷地内に高峰の研究室のイメージぴったりの建物を見つけた。無理を承知で燃やすシーンを撮りたいとお願いすると、突然にもかかわらず、本社の方が高峰譲吉を知っていて快諾してくれた。おかげで、思い通り迫力のある映像が撮れた。高峰が多くの人に支えられたように、この作品もいろんな人の力に

よって作られていると感じた。

古村 市川監督は即興性や瞬発的な空気を見事にカメラに収める方だ。主演の加藤さんは役作りに対して非常に厳しく、高峰になりきってせりふを納得のいくものに変えていく。そのため、現場で自分の台詞が変わることも多くてついていくのに必死だったが、学ぶことは本当に大きかった。今回の経験を活かして実力を養い、市川監督とはぜひまた一緒にさせて頂きたいと思う。

何事にも「懸命」が 高峰の魅力

——ほぼ不眠不休で研究に没頭する高峰の姿も描かれている。撮影を終えて、改めて高峰の魅力はどこなところにあると感じているか。

市川 一生懸命に物を見て、考えている点が最大の魅力だろう。「今度食事に行きましょう」と誘われても、大抵の人は笑顔で「是

非」と答えても行くことはまずない。おそらく、高峰はそう言われたら即座に「いつどこでしましよるか」と応じただろう。

アドレナリンが誕生したきっかけは、ある人が牛の臓物が役に立つものにならないかと問い掛けた、何気ないひと言がきっかけだった。「研究しておきますよ」という口約束ではなく、本気で考えた結果が世紀の大発見につながった。妻キャロラインに対して、一度好きになったら、2年離れていても思い続け、当時では珍しい国際結婚に踏み切っている。こういう真摯な生き方は出来そうで出来ない。

ず、いわば国の未来に命を賭けた。その器の大きさに引かれる。

金沢は日本で 最も美しい街

——市川監督は氷見市を映画制作の拠点とする「ヒミウッド構想」を提唱している。今回は金沢での仕事も多かったが、この街の印象は。

市川 実はこれまで金沢は旅行で数回訪れた程度で、じっくりと街を眺めたのは初めてだった。驚いたのは美しさだ。街のしつらえはもちろん、ゴミがない。日本の都市の中で最もきれいな街ではないか。

また、海、山という自然と、都会的な場所が1時間圏内に集まっている、きらびやかな雰囲気もある。東京からそう遠くもなく、北陸新幹線が通ればますます近くなる。映画づくりの面でも、魅力的な場所だと思う。

古村 最近、地元のイベントなどでゲストとして呼んで頂く機会

も増えてきた。

今回の撮影中には、応援してくれるファンの方たちが母校の高岡高校に訪問する手はずを整えてくれるなど、温かく迎えてくれた。高校時代は、俳優になるために東京に出ることばかり考えていたが、ふるさとを離れて初めて、その有り難さが身に染みている。これからも人との出会いを大切にしながら

ら全力で頑張りたい。

海外映画祭出品も視野に

——来春の公開に向けての意気込みを教えてください。

市川 海外の映画祭に積極的に応募しようと考えている。受賞うんぬんより、日米の橋渡しになった高峰博士の存在を広く知ってもらいたいからだ。特にアメリカは食を中心に日本ブームが続いており、台詞も後半半分以上が英語なので、受け入れられやすいのではなか。映画の公開形式についても、当初の2部構成にこだわらず、1本化して、より劇場向きの形に変えていくことも検討している。

海外出品を視野に、編集はロス在住の日本人で、ハリウッド映画「リトル・ブッダ」などの編集を手掛けた経験を持つ横山智佐子さんをお願いしている。高峰同様、アメリカで成功をおさめる難しさを知る横山さんと、高峰の魅力を十分に引き出す作品に仕上げたい。



撮影が終了し、くつろいだ笑顔の市川監督(右)と古村さん